

# 知識探訪

## 多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

### 60年以上続いているマレーシアの文芸雑誌「蕉風」

舛谷鋭 (立教大学観光学部教授)

言語を問わずプロ作家がほとんどいない東南アジアの文壇において、奇跡的に 60 年以上続いているマレーシアの中国語文芸雑誌「蕉風」(Bulanan Chao Foon) は 2020 年中に発行がなく心配されたが、近く 514 号が発行されると聞く。

日本には 1904 年創刊の「新潮」などの文芸誌もあるが、「蕉風」は 99 年にいったん休刊した際に「出版史上最も長く続いている中国語文芸雑誌」と報じられたことの真偽はともかく、東南アジアはもちろん、中国本土、台湾、香港、マカオの兩岸四地を含めても、中国語で現存している文芸雑誌としては、かなり古い方ではなかろうか。



「蕉風」の創刊号 (筆者提供)

55 年に方天(本名:張海威)の主編で登場した「蕉風」はシンガポールでの発行ながら、当初香港でも読まれていた。張海威という名に聞き覚えのある向きもあるが、毛沢東に追われた中国共産党の有力者、張国壽の実子である。大陸以外の中国語文壇で屈指の長編作家である黄崖、99 年まで物心ともに支え続けた姚拓ら、主に香港経由で東南アジアに「南下」してきた「学生週報」

ゆかりの華語系華人(サイノフォン)作家たちによって、最初の 40 年で土台が築かれた。

50 年代末には発行地を当時のマラヤ(現マレーシア)に移し、その後も中国語を非国語とする地域では最も充実したマレーシアの華文教育制度に支えられ、華人の民族文学の発表の場として、主に現地華人の投稿によって成り立ってきた。マレー文学やインドネシア文学など、東南アジアの他民族の文学や、台湾文学、中国現代文学の紹介の場でもあり、「現代派」と呼ばれるモダニズム作家の牙城でもあった。

「蕉風」は留台(台湾留学)組を中心に、マレーシア華人を主な読者としており、常に新しい血を入れ続けた編集陣は、「星洲日報」など華字紙の文芸欄担当者の養成の場ともなっていたが、アジア通貨危機に伴うマレーシア経済低迷の中、99 年 2 月にいったん休刊した。

創刊当初から毎号 1,500 リンギ(約 4 万円)、90 年代末には毎号 6,000 リンギの赤字を出し続けていた公称 2,000 部の文芸雑誌が生き長らえたのは、実業家としても成功した華人作家らの無償の擁護によるもので、積み重なる損失に耐えられなくなったのは当然の成り行きだったかもしれない。

2002 年 12 月にはジョホール州ジョホールバルの華人系カレッジである南方学院(12 年からユニバーシティカレッジ)内の馬華文学館で、489 号からの復刊が始まった。当初は年 2 回発行を目標としていたが、04 年、08 年、10 年、12 年、13 年、15~19 年は年 1 回となった。コロナ禍で 20 年分は 21 年中に 514 号として発行されるそうだ。

「蕉風」を創刊号からそろいで持っているのはジョホールバルの馬華文学館とシンガポール国立大学中文図書館だが、所蔵調査中に欠号を照らし合わせたところ、両館が寄贈交換すればそろいとなることに気づき、両者の間を橋渡しできたのはよい思い出。

日本ではマラヤ大の呉天才蔵書(Goh Collection)を立教大学図書館で購入した時に混ざっていた分と、姚拓氏から託された分、そして個人所蔵分を寄贈した分を合わせて、66 年の発行分から欠号ありだが 488 号までそろっている。南方学院に発行が移管された後は内山書店に日本国内での代理店をお願いし、立教大学新座図書館で購読している。京都大学図書館でも収集を開始したと聞く。

クアラランプールのスランゴール中華大会堂内の華社研究センター集賢図書館にも姚拓氏からの寄贈分などがあつたかと思うが、そろいにはほど遠かった。未確認だが、スランゴール州カジャンの新紀元大学学院の陳六史図書館の方が近年、方修文庫や李錦宗蔵書など文芸資料の収集を進めているので期待できるかもしれない。

#### < 筆者紹介 >

前回の東京オリンピックのころ、東京に生まれる。早稲田大学助手を経て、現在、立教大学観光学部教授。マラヤ大学東アジア学科講師、南洋工科大学中国研究学科客員教授を歴任。専門は昨今サイノフォンとも呼ばれるマレーシア華人文学(馬華文学)をはじめとした、移動に関わる観光文学。文学研究を通じ、東南アジア華人社会に広い人脈を持つ。